

# 小学生の頃の養育者からの言葉かけが女子大学生の 自己制御機能の発達に与える影響

森下 正 康  
(発達教育学部児童学科)

藤村 あず さ  
(発達教育学部児童学科08期生)

小学生の頃、養育者に対する「信頼」が高い場合、養育者からの自己抑制や自己主張を促す言葉かけが多かった学生の方が、少なかった学生よりも自己制御力（自己抑制力、自己主張力、頑張る力）は高いという仮説を検証することを目的とした。女子大学生を対象に、小学生の頃の養育者からの言葉かけと養育者に対する信頼、現時点での自己抑制力、自己主張力、頑張る力について質問紙調査を行った。そして、346名分のデータを分析した。因子分析によって尺度を作成し、アルファ係数を算出して尺度の信頼性を確認した。養育者からの言葉かけと信頼に関して、得点の高い群と低い群を作り、自己制御力をそれぞれ従属変数として2要因の分散分析を行った。その結果、①養育者への「信頼」の高い群の方が「自己抑制力」は高かった。特に、養育者への「信頼」が高かつ「自己主張」を促進する言葉かけが多い群は、「自己抑制力」が高かった。②養育者からの「自己抑制」や「自己主張」を促進する言葉かけの多い群の方が「自己主張力」は高いという傾向があった。また、養育者に対する「信頼」の低い群の方が「自己主張力」は高いという傾向があった。③一般に養育者への「信頼」の高い群の方が「頑張る力」は高かった。さらに交互作用が有意で、養育者への「信頼」が高かつ「自己抑制」や「自己主張」を促進する言葉かけが多い群は、他の群より有意に「頑張る力」が高かった。したがって、「頑張る力」については仮説を支持する結果であった。

キーワード：自己制御機能、自己抑制、自己主張、言葉かけ、親子関係、信頼関係、女子大学生

## 問 題

課題を達成する場合や他者とのかかわる際に自己制御（self-regulation）能力が必要となる。自己制御能力とは、場面や状況に応じて、自らの情動、欲求、注意を能動的に調整し、適切に行動できる能力とされている（大内・長尾・櫻井, 2008）。この自己制御能力には自己抑制（self control）と自己主張（self assertion）の二つの側面があって、その二つの機能がバランスよく発達することが重要だと、指摘されている（柏木, 1988）。自己抑制の側面は、自己の欲求を抑えて行動を統制・調整する機能であり（堂野, 1996）、自己主張の側面は、他人の権利を侵害することなく個人の思考と感情を敵対的でない仕方で表現できる機能とされている（濱口,

1994）。

さらに、両機能に支えられた機能として、課題を達成するために最後まで頑張る力がある。これまでの因子分析による研究では、この機能は自己抑制の機能の因子の側面として抽出されることが多かった（森下, 2003）。しかし、この機能はたんにがまんするという抑制的な機能だけではなく、課題に積極的に取り組もうとする自己主張的な側面をももち、自己制御機能の中核的な特性であると考えている。

このような自己制御の特徴は、乳幼児の気質との関連が深いことが示されている（水野・本城, 1998；森下, 1989）。その気質的な特徴自身も、子どもと周りの人との相互作用のなかで変容していくものだと考えられる。

そこで、本研究においては、周りの人たちとのかかわりのなかで、どのように子どもの自己制御機能が発達していくかを明らかにしたい。柏木(1988)は、親の介入・過保護が自己抑制や自己主張の発達にマイナスの影響を与えると指摘している。それは、介入・過保護が子どもの幅広い経験を制限するとともに、主体的に判断し自主的に行動する態度や高度を育てないからだと考えられる。そのような視点からは、Hoffman(1963, 1970)の力中心のストラテジー(power-assertive strategy)は自己制御の発達にマイナスの影響を与え、誘導的ストラテジー(inductive strategy)はプラスの影響を与えられ、この誘導的ストラテジーは、日本の文化的特徴とされてきた、子どもの気持ちや自我に訴えるという、しつけスタイル(小嶋, 1986, 1987; 東, 1994)と共通しているだろう。

子どもにとって、周りの人たちのなかで最もかかわりの深いのは母親や父親であろう。そのような親の養育態度が子どもの自己抑制力と自己主張力にどのような影響を与えるかについて、いくつかの研究がなされている。戸田(2006)は、幼稚園の母親に子どもに対する態度の評定を、幼稚園の先生には子どもの自己抑制や自己主張についての評定を求め、両者の関連を探った。その結果、幼児の自己主張にマイナスの影響を与えていたのは、過保護と甘やかしであった。森下(2001)は、父母の養育態度と幼児の自己制御との関連に注目した。父母共に受容的な態度は、女兒の自己抑制の発達にとってプラスに働く。父母共に統制が緩やかな場合は女兒の自己抑制の発達にプラスの影響を与えるが、男児の自己主張の発達にマイナスの影響を与える。また、父母共に養育態度の矛盾が少ないことが男児の自己抑制や自己主張の発達にとって重要である。さらに、自己主張に関しては男児の場合は父親が、女兒の場合は母親が子育ての実権を持っている方が発達する、つまり、自己主張については同性の親へのモデリングが生じている可能性があることが示唆された。

家庭において、親が期待する方向に教育やしつけを行うために「言葉かけ」が用いられてい

る。言葉かけは具体的な形で子どもに伝わり、理解しやすいものとなっている。しかし、「言葉かけ」に関する研究は多くはない。子どもの共感性に母親からの言葉かけがどのような影響を与えるかについて、田中・岩立(2006)は、幼稚園児を対象に、研究を行っている。母親と幼児が出会う場面において、「～ちゃんがそんなこと言われたらどう? 悲しいでしょう」などのように、相手の感情についての言及することの影響について研究した。その結果、そのような言葉かけは幼児のネガティブ感情の共感性を高めるが、ポジティブ感情の共感性を高めないことを示唆している。

また、小南(2010)は、子どもの頃の日常場面における母親からの言葉かけを因子分析して尺度を作成した。そして、母親から肯定的な言葉かけを多く受けた女子学生の方が自尊感情は高く、否定的な言葉かけを多く受けた女子学生の方が自己否定感が高いという結果を示した。小川ほか(2011)の女子学生を対象にした研究では、父親からの否定的な言葉かけは父親イメージを介して母親イメージに影響し、その母親イメージが親からの肯定的評価を介して自己への肯定や自尊感情に影響することを示している。母親からの言葉かけはこのプロセスに影響をおよぼさなかった。また、社会性スキルの訓練のなかにあたたかい言葉かけが取り入れられているが、それらは抑うつ症状の改善に効果をもたらしている(石川ほか, 2010)。

小学生を対象に、養育者からの言葉かけの特徴が偏食や自尊感情へ与える影響について、森下・藤田(2012a; 2012b)は共分散構造分析を行った。その結果、母親から食べ物への「感謝」の言葉かけが多いほど、「行儀」や「誘導」「妥協」の言葉かけが少ないほど、偏食が少ないことが示された。また、母親からの食べ物に対する「感謝」や「共感」の言葉かけが多く、「拒否」の言葉かけが少ないほど「食卓の雰囲気」が楽しく、それを介して幼児の「自尊感情」や「他者受容」を高めるということが明らかとなった。この研究では、たんに母親からの言葉かけが子どもに直接影響するというよりは、言

言葉かけの背景にある母親の態度が子どもの「自尊感情」や「他者受容」に影響するのではないかと言及している。両研究において、先述の誘導的な言葉かけは偏食に対してむしろマイナスの影響を与えていた点については、今後の検討が必要だろう。

親からの言葉かけが、子どもの自己制御の発達にどのような影響を与えるかに関する研究は少ない。母親の言葉かけが自己抑制や自己主張におよぼす影響について、子どもは4、5歳頃から他者から言われた言葉を自分のなかに取り込んでいき、その言葉を自分自身の行動を制御するために用いるようになると、無藤・麻生(2004)は指摘する。また、柏木(1983)によれば、子どもが自分の言語で行動統制の役割をとりはじめるのは、他者からの言葉かけにしたがってそのまま行動する時期より少し後になる。また、親のルール等を子どもが自分のなかに取り込む際、子どもが信頼を抱いている親からの物理的な罰や体罰は効果があるが、うまくいっていない親からの体罰は強い反発を招き、いっそう望ましくない行動をおおることになるとも指摘している(柏木, 1983)。強い信頼関係を築いている養育者からの言葉かけは受け入れやすく、そうでない養育者からの言葉かけは、むしろ反発されたり無視されたりすると予想される。

このように他者からの言葉かけを通じて、子どもが自分自身を抑制したり主張したりしながら自己を制御する力につながっていくとすれば、養育者との信頼関係を基盤にしていると考えられる。つまり、養育者との信頼関係のもとで幼い頃からの自己制御を促進するような言葉かけが多いほど、子どもは言葉かけの内容をより多く自分のなかに取り込み、自己抑制力や自己主張力などの自己制御力をより高めると予想される。

以上のことから、次のような仮説を設定した。仮説：小学生の頃に養育者に対する信頼が高い場合、養育者からの自己抑制や自己主張を促す言葉かけが多い群の方が、少ない群より自己抑制力、自己主張力、頑張る力は高いだろう。

## 方法

- (1) 調査対象 調査対象は、主として女子大学の児童学科の学生395名であった。そのうち記入もれなどのない有効回答者346名であった。養育者としてあげられたのは大半が母親であった。
- (2) 手続き 授業中に質問紙を配布し、記入後その場で回収した。
- (3) 調査内容 ①養育者からの言葉かけに関する質問項目：子どもの自己抑制と自己主張を測定するための質問紙・担任用(森下, 2001)をもとに、自己抑制を促す10項目、自己主張を促す10項目の計20項目を新しく作成した(表1参照)。各項目について、小学生の頃に養育者からどの程度そのような言葉をかけられたかについて、「言われなかった」「たまに言われた」「時々言われた」「よく言われた」の4件法で回答を求めた。②養育者に対する信頼に関する質問項目：養育者に対する信頼や愛情を測定するために、親に対する子どもの態度スケール(森下, 1977)から9項目、親に対する信頼尺度(佐藤, 1993)から1項目を選出し、主語を養育者に変更して計10項目を使用した(表2参照)。小学生の頃の養育者について、「当てはまらない」「やや当てはまらない」「どちらともいえない」「やや当てはまる」「当てはまる」の5件法で回答を求めた。③自己抑制力・自己主張力に関する質問項目：子どもの自己抑制と自己主張を測定するための質問紙・担任用(森下, 2001)のなかから計20項目を、学生用に表現を修正して使用した(表3参照)。現時点での自分について「ちがう」「ややちがう」「ややそうだ」「そうだ」の4件法で回答を求めた。

## 結果

### 1. 各尺度の因子分析

それぞれの尺度項目について、改めて因子分析を行った。まず主成分分析を行い、固有値の変動(スクリープロット)を参考にして因子数を決定した。次に最尤法により因子分析を行い、

最終的にプロマックス回転を行った。

(1) 養育者からの言葉かけの因子分析

養育者からの言葉かけ20項目について因子分析を行った結果、4つの因子が得られた(表1)。それぞれに高く負荷する項目内容から、第1因子はルールを守り自分の欲求や行動を抑制するよという「自己抑制」を促す言葉かけと命名した。第2因子は自分の欲求や意志を積極的に表現することが大切だという「自己主張」を促す言葉かけ、第3因子ははきはきと話したり返事をしたりするよという「明確さ」を促す言葉かけと命名した。第4因子はいやなことでもがまんし最後まで頑張ることが大切だという「忍耐」因子と命名した。因子分析に基づいて内容的妥当性を考慮しながら尺度を作成し、信頼性を求めた。「自己抑制」尺度と「自己主張」尺度の間に0.486という正の相関がみられ、それぞれの $\alpha$ 係数は0.812, 0.772と比較的高い値であった。以降の分析では、研究目的に沿って「自己抑制」尺度と「自己主張」尺度を利用す

表1 養育者からの言葉かけ因子と項目

「自己抑制」
1. 他の子も使えるように、おもちゃや道具はかわらばんこに使うのよ。
2. ルールを守って遊びなさいね。
3. 順番を守って遊びなさいね。
4. 人のものを勝手に触ったり、使ったりしてはいけないのよ。
5. 人が話している時に、よそ見をしたり手遊びをしたりしてはだめなのよ。
6. 何でもすぐに泣かないの。
「自己主張」
1. 他の人と意見が違っていても自分の意見を言うことは大切なのよ。
2. 自分の気持ちや考えを人に伝えることは大切なのよ。
3. 自分で考えて行動することは大切なのよ。
4. 嫌だと思ったら『嫌だ、やめて』と言ったらいいのよ。
5. してほしいことがあったら、周りの大人に頼んだらいいからね。
6. あなたが選んでいいからね。

ることとした。

(2) 養育者に対する信頼の因子分析

養育者への信頼について因子分析を行った結果、二つの因子が得られた。第1因子は、養育者に対する親しみと愛情や信頼を示す因子であり「信頼」の因子と命名した(表2)。第2因子は、「養育者に何か頼まれると嬉しかった」というように養育者の役に立ちたいという気持ちを表す因子であり、第1因子との相関が.539と高かった。第1因子の「信頼」は $\alpha$ 係数も高く、以下の分析では、研究目的に照らしてこの「信頼」尺度を使用した。

表2 養育者に対する信頼 ( $\alpha$ .780)

⑥養育者(母親、祖母など)に励ましてもらうと元気が出た。
④養育者の顔を見るのが楽しみだった。
⑩養育者と一緒にいる時は楽しかった。
①養育者は私の言い分をよく聞いてくれた。
②養育者から話しかけられると嬉しかった。
⑤養育者が病気になるるとたいへん心配だった。
③養育者は私の気持ちをよく理解してくれなかった。*
⑦養育者からほめられても嬉しくなかった。*

\*逆転項目

(3) 自己抑制力・自己主張力の因子分析

調査対象者の自己抑制力・自己主張力について因子分析の結果、4つの因子が得られた。それぞれに高く負荷する項目内容から、第1因子を「自己主張力」、第2因子を最後まで「頑張る力」、第3因子を「自己抑制力」と命名した(表3)。第4因子は「欲しい物がすぐに手に入らなくてもがまんできる」という項目にのみ負荷が高く、特殊因子と考えられたので、以降の分析には用いなかった。因子間の相関と各因子に対応する尺度の $\alpha$ 係数を表4に示す。因子間の相関をみると、「自己主張力」と「自己抑制力」の間には低い正の相関しかみられないが、「頑張る力」は「自己抑制力」や「自己主張力」と比較的高い正の相関がみられた。

各尺度得点について得点分布を吟味した。その結果、養育者からの言葉かけ得点は広い分布

表3 自己抑制力・自己主張力の因子

【自己主張力】	
⑮他人と意見が違っていても、自分の意見を言う。	
⑯友人に注意することが出来る。	
⑰嫌なことは、はっきりと断る。	
⑱自分の要望をはっきり相手に伝える。	
⑳自分の席に座っている人に移動してほしい時はそこが自分の席であることを相手に言える。	
㉑自分の思ったことを人前でなかなか口に出して言えない。	
㉒進んで手を挙げて発表する。	
㉓自分が並んでいる前に誰かが割り込んでいた時に相手に注意できる。	
㉔人に聞かれたら、はっきりと答える。	
㉕友達の輪のなかに自分から入ることができる。	
【頑張る力】	
㉖時間がかかっても最後まで頑張る。	
㉗困難なことでも諦めずに行く。	
㉘やりたくないことでもやらないといけないときはやる。	
㉙失敗したりうまくいかないときにすぐに諦める。*	
【自己抑制力】	
㉚相手の話を最後までしっかり聞く。	
㉛相手の話を集中して聞くことができない。*	
㉜興味がなくても、最後まで黙って人の話を聞く。	
㉝ルールを守ることができる。	
㉞人の物を許可なく勝手に触ったり使用したりしない。	

\*逆転項目

表4 因子間相関とα係数

因子	自己主張力	頑張る力	自己抑制力
自己主張力			
頑張る力	.348		
自己抑制力	.178	.482	
α 係数	.838	.781	.633

が認められた。また、「信頼」「自己抑制力」「自己主張力」の尺度得点は、いずれも正規分布に近かった。

尺度得点間の相関(表5)をみると、「自己抑制」を促す言葉かけと「自己主張」を促す言葉かけとの間には正の相関がみられた。「信頼」

は「自己抑制」や「自己主張」を促す言葉かけと低い正の相関がみられた。また、「自己主張力」と「自己抑制力」との間には相関がなかったが、「頑張る力」は「自己抑制力」と「自己主張力」の両方と正の相関がみられた。「自己抑制力」は「自己主張」を促す言葉かけと、「自己主張力」は「自己抑制」を促す言葉かけと低い正の相関があった。また、「信頼関係」は「自己抑制力」や「頑張る力」との間に低い正の相関があった。

表5 尺度得点間の相関

	抑制	主張	信頼	抑制力	主張力
主張	.414**				
信頼	.118*	.253**			
抑制力	.032	.112*	.117*		
主張力	.142**	.043	-.038	.027	
頑張る力	.070	.098	.126*	.359**	.247**

## 2. 養育者からの言葉かけと信頼の影響

小学生の頃に養育者からの「自己抑制」と「自己主張」を促進する言葉かけや、小学生の頃の養育者への「信頼」について、各尺度得点の中央値に基づいてそれぞれ約2分の1になるように、得点の低いものをL群、高いものをH群という2群に分類した。養育者への「信頼」と言葉かけを独立変数として、現時点での「自己抑制力」「自己主張力」「頑張る力」をそれぞれ従属変数として2要因の分散分析を行った。各群の平均値・標準偏差(SD)・人数(N)を表6、表7、表8に示す。

### (1) 自己抑制力

#### ① 自己抑制を促す言葉かけと「信頼」の影響

養育者からの自己抑制を促す言葉かけ(L・H)と養育者に対する「信頼」(L・H)を独立変数として、各群における「自己抑制力」の平均値をもとめ分散分析を行った。その結果、交互作用はなく、自己抑制を促す言葉かけ要因にも有意差はなく、信頼要因にのみ有意差があった(F(1,342)=5.133, p<.05)。信頼H群の方がL群よりも「自己抑制力」得点が高かった。したがって、養育者からの自己抑制を促す

表6 自己抑制力の平均値 (SD) と人数

言葉かけ	信頼L		信頼H	
	平均値 (SD)	N	平均値 (SD)	N
抑制L	11.0 (2.46)	104	11.5 (2.43)	93
抑制H	10.9 (2.22)	71	11.6 (2.20)	78
主張L	11.1 (2.36)	119	11.0 (2.57)	91
主張H	10.9 (2.36)	56	12.2 (1.85)	80

表7 自己主張力の平均値 (SD) と人数

言葉かけ	信頼L		信頼H	
	平均値 (SD)	N	平均値 (SD)	N
抑制L	14.9 (4.76)	104	13.4 (4.75)	93
抑制H	15.9 (3.99)	71	15.4 (5.25)	78
主張L	15.1 (4.54)	119	13.7 (4.73)	91
主張H	15.6 (4.35)	56	15.1 (5.37)	80

表8 頑張る力の平均値 (SD) と人数

言葉かけ	信頼L		信頼H	
	平均値 (SD)	N	平均値 (SD)	N
抑制L	8.5 (2.17)	104	8.5 (2.48)	93
抑制H	8.0 (2.36)	71	9.1 (1.97)	78
主張L	8.2 (2.34)	119	8.4 (2.37)	91
主張H	8.4 (2.06)	56	9.2 (2.10)	80

言葉かけは「自己抑制力」とは関連しないが、養育者に対する信頼が高い人は「自己抑制力」が高いということがわかった。

② 自己主張的な言葉かけと信頼の影響

「自己抑制力」について同じように分散分析を行った結果、自己主張を促す言葉かけ要因と信頼要因に有意な交互作用があった ( $F(1,342) = 6.563, p < .05$ )。また、信頼要因にも有意差があった ( $F(1,342) = 6.010, p < .05$ )。交互作用について、Bonferroni法 (石村, 2011) によってその後の検定を行った結果、図1に示すように、信頼H群において主張的言葉かけH群の方がL群よりも1%レベルで有意に「自己抑制力」得点が高かった。また、主張的言葉かけH群においては信頼H群の方がL群よりも「自己

抑制力」得点が有意に高かった。つまり、信頼H群における主張的言葉かけの多い群は、他の群に比較して「自己抑制力」得点が著しく高いことが明らかとなった。したがって、小学生時代に養育者に対する信頼が高くかつ母親から自己主張を促進する言葉かけが多かった人は、「自己抑制力」が高いことがわかった。

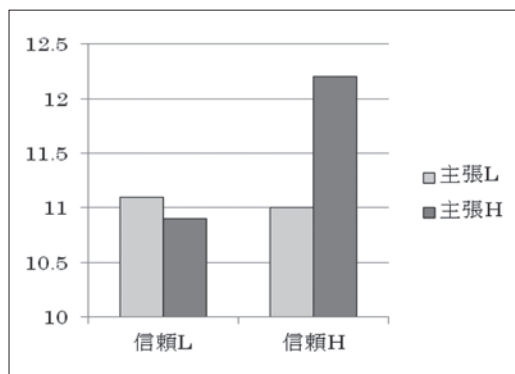


図1 主張的な言葉かけ・信頼と自己抑制力

(2) 自己主張力

① 自己抑制的な言葉かけと信頼の影響

分散分析の結果、交互作用は有意ではなく、自己抑制的な言葉かけ要因に有意差があり、H群の方がL群よりも「自己主張力」得点が高かった ( $F(1,342) = 8.653, p < .01$ )。また、信頼L群の方が信頼H群よりも「自己主張力」が高い傾向があった ( $F(1,342) = 3.492, p < .10$ )。したがって、養育者から自己抑制を促す言葉かけが多かった人の方が「自己主張力」は高く、また養育者に対する信頼が低かった人の方が「自己主張力」は高い傾向があった。

② 自己主張的な言葉かけと信頼の影響

分散分析の結果、交互作用は有意でなく、自己主張的な言葉かけ要因と信頼要因にそれぞれに有意な傾向があった ( $F(1,342) = 3.202, p < .10$ ;  $F(1,342) = 3.613, p < .10$ ) (図4)。つまり、自己主張的な言葉かけH群の方がL群よりも「自己主張力」が高い傾向があり、また、信頼L群の方がH群よりも「自己主張力」が高いという傾向があった。したがって、養育者から自己主張的な言葉かけが多かった人や養育者

に対する信頼が低かった人は、「自己主張力」が高い傾向があるということがわかった。

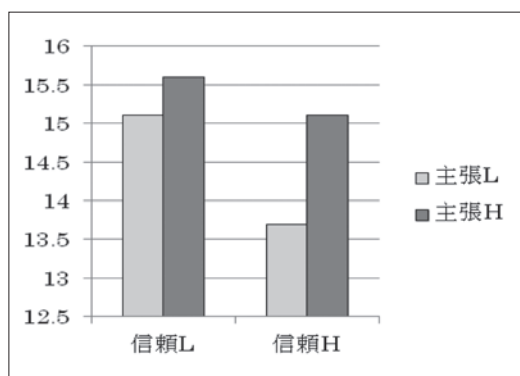


図2 主張的な言葉かけ・信頼と自己主張力

(3) 頑張る力

① 自己抑制的な言葉かけと信頼の影響

頑張る力得点について分散分析を行った結果、信頼要因に有意差があり ( $F(1,342) = 4.548, p < .05$ ), 自己抑制的な言葉かけ要因と信頼要因との間に交互作用があった ( $F(1,342) = 4.348, p < .05$ )。交互作用について Bonferroni 法によってその後の検定を行った結果、図3に示すように、自己抑制的な言葉かけH群においては、信頼H群の方がL群より「頑張る力」得点が有意に高く、自己抑制的な言葉かけL群では差がなかった。また、信頼H群では自己抑制的な言葉かけH群の方がL群より「頑張る力」得点が高い傾向があり、信頼のL群ではその反対の方向を示していたが有意差はなかった。したがって、養育者から自己抑制的な言葉かけが多かった人の場合、養育者に対する信頼が低い人は「頑張る力」が低く、養育者に対する信頼の高い人は「頑張る力」が高かった。しかし、養育者からの自己抑制的な言葉かけが少なかった人の場合は、信頼の高さは「頑張る力」に影響しないことがわかった。

② 自己主張的な言葉かけと信頼の影響

分散分析の結果、交互作用は有意でなく、自己主張的な言葉かけ要因に有意差 ( $F(1,342) = 4.005, p < .05$ ) があり、H群の方がL群よりも「頑張る力」得点が高かった(図4)。また、

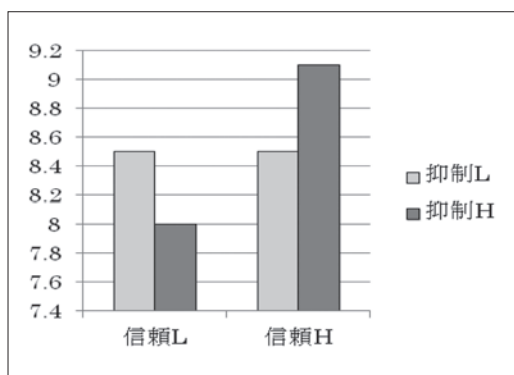


図3 抑制的な言葉かけ・信頼と頑張る力

信頼要因にも有意な傾向 ( $F(1,342) = 3.081, p < .10$ ) があり、信頼H群の方がL群よりも「頑張る力」得点が高い傾向にあった。したがって、一般に、養育者から自己主張を促す言葉かけが多い人や養育者に対する信頼が高い人は、「頑張る力」が高いことがわかった。特に、養育者への信頼が高くかつ自己主張を促進する言葉かけの多い群が、著しく「頑張る力」が高いことを示していた。

養育者からの言葉かけ、「信頼」関係、「自己抑制力」「自己主張力」「頑張る力」が相互にどのような関連があるかを総合的に明らかにするために、パス解析を行った(小塩, 2008; 豊田, 2007)。その結果、図5に示すように比較的適合性の高いパスモデルが得られた。パス係数は、1~10%レベルまでのものを示している。養育者への信頼が高いほどかつ自己主張的な言葉かけが多いほど「自己抑制力」は高かった。また、

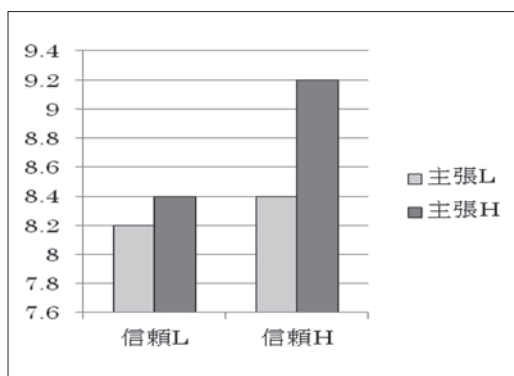


図4 主張的な言葉かけ・信頼と頑張る力

自己抑制的な言葉かけが「自己主張力」を高めていた。さらに、養育者との「信頼」が「頑張る力」を高めていた。そして、自己主張的な言葉かけが多いほど養育者との信頼関係を高め、それを介して「自己抑制力」や「頑張る力」を高めていた。自己抑制力と「自己主張力」は共に「頑張る力」を高めていた。「頑張る力」の説明率は19%であった。

### 考察

本研究は、小学生の頃の養育者からの言葉かけと養育者に対する信頼が、女子大学生の自己主張と自己抑制の発達にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とした。

その結果、「自己抑制力」について、自己抑制を促す言葉かけは子どもの「自己抑制力」に影響しないが、養育者に対する信頼が「自己抑制力」に影響するということがわかった。つまり、抑制的な言葉かけの多少にかかわらず、信頼関係の高い場合は「自己抑制力」が高いということを示している。したがって、養育者との高い信頼関係のなかで、「自己抑制力」が形成されると考えられる。この点は、社会のルールの発達や自律的な行動統制の発達にとって、親との“関係”が特に必要であるという柏木(1983)の指摘と一致している。また、森下

(2001)の結果とも一致しており、子どもは信頼関係の高い養育者の思いを内面化していて、必要とき行動にブレーキがかかりやすいといえることができるだろう。

それに対して、自己主張を促す言葉かけについては、養育者に対して信頼が高い場合にのみ、子どもの自己抑制力を高めた。その結果を詳細に比較すると、信頼関係の高い群(H群)における言葉かけL群の特徴に違いにあることが分かる。自己抑制を促進する言葉かけは、それが少なくとも信頼関係のなかで子どもの「自己抑制力」は発達する。それに対して、自己主張を促進する言葉かけについては、それが多き場合にのみ「自己抑制力」が発達すると考えられる。そこにどのような要因が働いているかは不明である。

「自己主張力」について、養育者から自己主張や自己抑制を促す言葉かけが多い人の方が、自己主張力が高かった。つまり、自己主張の言葉かけだけでなく、自己抑制の言葉かけが多い母親の子どもの方が「自己主張力」は高いということがわかった。自己抑制の言葉かけと自己主張の言葉かけとはかなり高い正の相関があり、自己抑制と自己主張に関する言葉かけは、どちらが多くてどちらかが少ないのではない。一般にそのような言葉かけが比較的多い養育者と

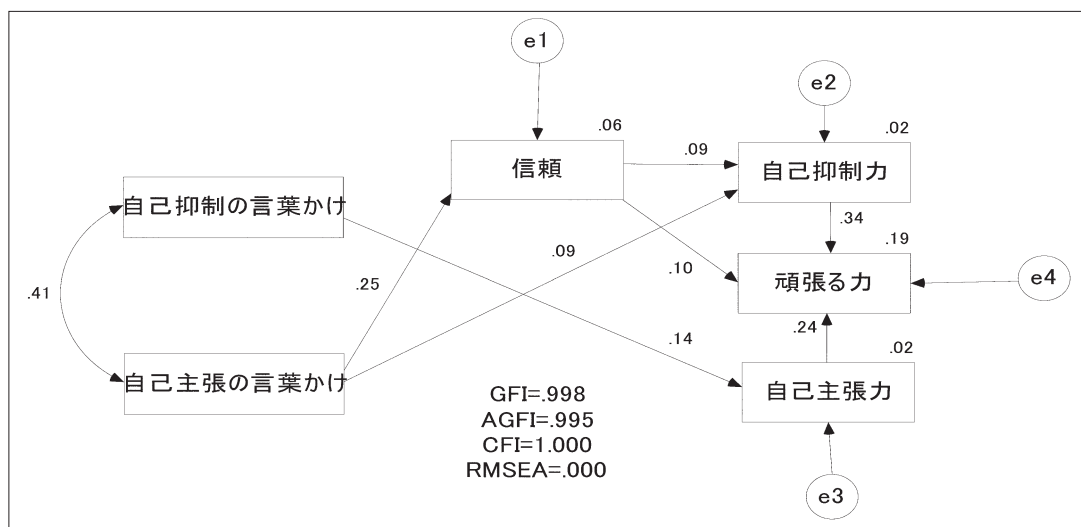


図5 言葉かけ、愛着と自己主張力、頑張る力、自己抑制力のパス図



少ない養育者に分かれるので、それは自分の子どもに自律や自己制御の力を育てようとする親の態度の強さを反映していると考えられる。そのような自己制御する力を育てようとする親の子どもは「自己主張力」が高いと考えられる。

他方、「自己主張力」は「自己抑制力」の結果とは異なって、養育者への信頼の低い者の方が「自己主張力」は高かったのである。つまり、「自己主張力」は養育者との信頼関係の低いなかで形成される可能性がある。言葉かけの多さと信頼関係の間に交互作用が無かったことから、養育者に対する信頼が養育者からの言葉かけを受け入れやすくしたというわけではなかった。

以上のことから、自己主張の形成には二つのメカニズムが働いていると推測される。一つは親の言葉かけや自己制御機能を育てようとする親の態度の影響を受ける場合である。もう一つは信頼関係の低い養育者との対立や反抗という相互作用のなかで形成される自己主張である。信頼関係の高い場合は、自己主張をしなくても養育者から自分の欲求や希望が感受され受容される体験が多くなり、自己主張の必要性が低くなるのではないか。それに対して信頼関係の低い場合は、自己の欲求や希望は無視され軽視されることが多く、自己主張が高くならざるを得ないと考えられる。

「頑張る力」について、養育者との信頼関係の高い群の方が低い群より「頑張る力」は高かった。したがって、一般に養育者との信頼関係のなかで、「自己抑制力」と同じように「頑張る力」も形成されると考えられる。さらに、養育者からの自己抑制を促す言葉かけの効果は、養育者との信頼関係と交互作用があり、自己抑制を促す言葉かけが多い人の場合、養育者に対する信頼の高い人は「頑張る力」が著しく高く、養育者に対する信頼が低い人は「頑張る力」が低いということがわかった。他方、養育者からの自己抑制的な言葉かけが少ない人の場合は、養育者との信頼関係の高さは「頑張る力」に差をもたらさなかった。したがって、養育者との信頼関係のなかで自己抑制的な言葉かけが、「頑張る力」の形成に強い効果をもったといえるだ

ろう。その反対に、信頼関係の無いなかでの自己抑制を促す言葉かけは、むしろ「頑張る力」を低下させた可能性がある。つまりこの結果は仮説を支持するものであった。

また、自己主張的な言葉かけも、養育者との信頼関係の高い場合に、「頑張る力」に効果をもたらした。自己抑制を促す言葉かけと同じように、自己主張を促す言葉かけも養育者との信頼関係のなかで「頑張る力」を育てると考えられる。したがって、信頼関係のなかで、子どもの自己抑制や自己主張を促す言葉かけは最後まで「頑張る力」の発達にプラスの影響を与える可能性があるといえる。最後まで「頑張る力」は「自己抑制力」とも「自己主張力」とも相関の高い特性であり、両者に支えられた機能だといえるだろう。

そのことは、パス解析の結果からもいえた。「頑張る力」について、養育者との信頼関係は直接「頑張る力」を高めるが、自己抑制を促進する言葉かけは「自己主張力」を介して、自己主張を促進する言葉かけは「信頼」や「自己抑制力」を介して「頑張る力」を高めることが明らかとなった。ただし、パス解析の結果には、養育者との信頼関係の高い場合に、自己抑制を促進する言葉かけが「頑張る力」を高めるといような複雑な関連は反映されていない。パス解析は一般的な関連を示唆するが、要因間の交互作用を示唆しないという限界があるようだ。

本研究は、大学生に小学生の頃の母親の言葉かけや母親への気持ちを思い出してもらったの研究である。したがって、小学校時代の実際の母親の言葉かけや親子関係を測定しているという保証はない。むしろ、現時点から大学生が母親との関係をどのようにとらえているかを強く反映していると考えべきだろう。そこに内面化された母親の言葉かけや親子関係の特徴をみることができるかもしれない。したがって、本研究の結果は、内面化された言葉かけの内容と母親との信頼関係や親和関係が、どのように現在の自己抑制や自己主張、あるいは最後まで「頑張る力」と結びついているかという視点から解釈することが妥当かもしれない。また、そ

こには小学生時代の親子関係がどのように内面化され、それが現在の自己抑制や自己主張機能とどのように結びついているかを明らかにする課題が残される。そこにレトロスペクティブな研究法(小嶋, 1991)の問題点と、縦断的な研究の必要性が浮上してくる。

本研究は、主として母親の言葉かけに焦点を当ててきた。しかし、「私はお父さんの言葉かけの方が頭に残っている」という女子学生もいて、当然、父親の言葉かけや父子関係の影響について研究する課題もある。また、親からの言葉かけの影響は男子と女子では異なるかもしれないので、男子を対象とした研究も必要である。

### 引用文献

- 東 洋 1994 日本人のしつけと教育—発達の日米比較にもとづいて— 東京大学出版会
- 堂野恵子 1996 幼児の自己制御機能の発達と親が期待する子どもの将来像—日米比較 安田女子大学紀要, 24, 125-134.
- 濱口佳和 1994 児童用主張性尺度の構成 教育心理学研究, 42, 463-470.
- Hoffman, M. L. 1963 Parent discipline and the child's consideration for others. *Child Development*, 34, 573-588.
- Hoffman, M. L. 1970 Moral development. In Mussen, P. H. (Ed.) *Carmichael's manual of child psychology* (vol. 2) New York: Wiley
- 石川信一・岩永三智子・山下文大・佐藤 寛・佐藤正二 2010 社会的スキル訓練による児童の抑うつ症状への長期的効果, 58, 372-384.
- 石村貞夫 2011 SPSSによる分散分析と多重比較の手順 東京図書
- 柏木恵子 1983 子どもの「自己」の発達 東京大学出版
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達: 行動の自己制御機能を中心に 東京大学出版会
- 小嶋秀夫 1986 桑名・柏崎日記に現れた児童発達と家族生活(1) 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科, 33, 1-24.
- 小嶋秀夫 1987 桑名・柏崎日記に現れた児童発達と家族生活(2) 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科, 34, 189-217.
- 小嶋秀夫 1991 児童心理学への招待—学童期の発達と生活—サイエンス社
- 小南早苗 2010 母親の言葉かけと自尊感情の形

- 成について 京都女子大学発達教育学部児童学科卒業論文(未刊)
- 小塩真司 2008 初めての共分散構造分析: Amosによるパス解析 東京図書
- 水野里恵・本城秀次 1998 幼児の自己制御機能: 乳幼児と幼児期の気質との関連 日本発達心理学会, 発達心理学研究, 9, 131-141.
- 無藤 隆・麻生武編著 2004 保育ライブラリ 子どもを知る 教育心理学 北大路書房
- 森下正康 1977 親に対する子どもの態度スケールの作成とその分析—性格形成における同一視理論の検討のために— 和歌山大学教育学部紀要教育科学, 26, 77-86.
- 森下正康 1989 児童期の母子関係とパーソナリティの発達 心理学評論, 60-75.
- 森下正康 2001 幼児期の自己制御機能の発達(3) 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 11, 87-100.
- 森下正康 2003 幼児の自己制御機能の発達研究 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 13, 47-56.
- 森下正康・藤田のゆり 2012a 母親の言葉かけの特徴と食卓の雰囲気は児童の偏食におよぼす影響 京都女子大学発達教育学部紀要, 8, 117-126.
- 森下正康・藤田のゆり 2012b 母親の言葉かけの特徴と食卓の雰囲気は児童の自尊感情と他者受容におよぼす影響 発達教育学研究(京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後期課程紀要), 6, 31-41.
- 大内晶子・長尾仁美・櫻井茂男 2008 幼児の自己制御機能尺度の検討 教育心理学研究, 56, 414-425.
- 小川由紀子・山田智世・杉山里美・上岡美紀・平田裕美 2011 父親・母親の言葉かけと青年期女子の自尊感情との関連—影響を及ぼしているのは父親、それとも母親? 女子栄養大学紀要, 41, 35-41.
- 佐藤朗子 1993 青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連 名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学科, 40, 215-226.
- 田中あかり・岩立京子 2006 母親の幼児に対する「言葉かけ」が幼児の共感性に及ぼす影響: ポジティブ感情の共感に注目して 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 57, 63-70.
- 戸田須恵子 2006 母親の養育態度と幼児の自己制御機能および社会的行動との関係について 北海道教育大学釧路校研究紀要, 38, 59-69.
- 豊田秀樹 2007 共分散構造分析 [Amos編] 東京図書